

1 学校紹介

本校学区の袖ヶ浦団地は、昭和42年度に京葉港第一次埋立地として、鷺沼、津田沼、谷津地区海岸を埋め立て、日本住宅公団の手によって建てられた団地である。住民は、高齢者や外国人を見かけることも多く、本校にも各クラス複数名の外国籍の児童がいる。

学区は、千葉街道（国道14号線）以南と、京葉道路を挟んだ地域の中にある。周辺には公園があり、緑豊かで大変住みやすい環境である。児童数も昭和61年頃まで1,000名を超えていたが、だんだんと減少し現在は200名を切っている。交通機関に恵まれ、JR津田沼駅、新習志野駅からのバスの便もあり、通学・通勤に便利である。

全国でも珍しく鹿を飼育しており、高学年の児童が鹿小屋の清掃をしたり、餌やりをしたりして親しんでいる。

2 研究主題

考える楽しさにつながる学び

～学習素材や式の意味理解を高めることで、主体的に学習に取り組む意欲と態度を育む。～

3 研究の概要

(1) 児童の実態と課題

全国学力・学習状況調査において、本校児童の算数の平均正答率は、令和3年度は全国平均値をやや下回っていたが、令和4年度は全国平均値・県平均値をやや上回ることができた。

令和3年度の課題であった「データの活用」はよく理解できているといえる。しかし、「問題文を正しく読んで理解する」ことには引き続き課題がある。これらのことから本校児童の課題は、学習素材を中心とした文章問題の読解力向上にあると考え、研究の副主題として設定した。

(2) 学力向上のための取組

令和3年度の実践からの課題を受けて、令和4年度は「問いの意味理解の向上」を中心に据えて、以下について試行してきた。

① 身近なものを素材とする。

6年生の「比とその利用」の学習では、教科書にあるドレッシングの例題ではなく、本校で飼育しているシカのキャラクター・モモちゃんの画像から、**視覚的に画像を捉えて縦横のバランスを考える活動**を取り入れ、「比の見える化」をした。

日常的に目にしているキャラクターだけに、「同じみたいだけど、なんとなく細長い。」「少し広がっている。」等、感覚的にとらえたことを、数値として表していくことで、意欲的な姿が見られた。



② 実体験からの学びの重視

3年生の「重さ」の学習では、てんびんを使った体験活動を多く取り入れた。このことで、学習に対する関心・意欲が高まった状態で、教材と向き合うことができた。また、予測してから計測する体験活動を大切にすることで、児童の量感を養うこともできた。さらに、活動中心の単元構成にしたことで、文章問題での立式や計算をする際に、具体物の操作と結び付けて考えることができ、理解力が高まった。



③ 教科等横断的な取組

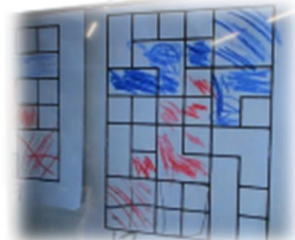
1年生の「大きなかず」の学習では、生活科で育てた自分のアサガオの種がいくつできたのかを調べた。入学してから愛着を持って育ててきたことで、自然な流れで大きい数の体系を知りたいという必要感が生まれた。

日常の具体的な場面に対応させることで、問いをしっかりとつकんだといえる。



④ 素材提示の仕方の工夫

4年生の「面積」の学習では、一マス
の大きさが異なるカードを使って、陣取
りゲームを行った。勝敗のあるゲームか
ら導入することで、「同じ基準で広さを測
りたい」という気持ちを、平方センチメ
ートルという普遍単位の理解につなげる
ことができた。



5年生の「小数のわり算」の学習では、
1mあたりの値段を比べる素材を、スモ
ールステップで提示することで、「どちら
が安いのか知りたい」という必要感を児
童にもたせることができた。

2mのリボンと3mのリボンがどちらも96円で売られています。1m分のおたんはいくらでしょう。
2m 96 ÷ 2 = 48 48円

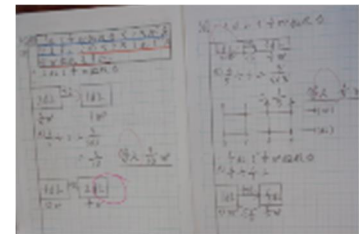
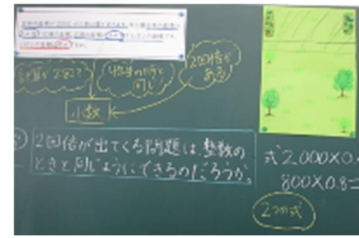
24mのリボンも96円で売られています。1m分のおたんはいくらでしょう。
96 ÷ 24 = 4

3mのリボンも23円で売られています。24m 96円のリボンと比べてどちらが安く買えますか。1m分のおたんを求めましょう。

⑤ 絵や図を使って読み解く

5年生の「小数のわり算」の学習では、公園を表す面積図を提示した。全体の小数倍となる部分を求める際にも、部分が全体よりも大きくなるようなことのないように、イメージをもって学習に取り組むことができた。

6年生の「分数のわり算」の学習では、問題文を関係図や数直線で表して、立式に結びつけて考えることができた。図や絵に書くことで、問いに対する意味理解を高めることができた事例である。



(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

忙しい担任の手が回りにくいところをサポートし、かつ「考える楽しさ」が感じられるような配慮をしてきた。

① ティーム・ティーチングで、支援を必要とする児童への声かけ

自力解決の時間に、困っている児童にヒントを与えたり、良い発想が書けていればノートに丸をつけたりするなどし、自信をもたせることをねらいとした。丸を付けてもらうことで発表の意欲が向上し、高学年でも挙手が増えた。また、慣れてくると、教師が声をかける前に「先生来てください。」と呼ぶ児童も増えてきている。



② 少人数指導

令和4年度は5年生の「割合」と「速さ」の単元で「じっくりコース」と「すいすいコース」の2つのコースに分けて行った。既習の計算に時間がかかってしまう児童や問題の意味がとらえづらい児童が複数名いるが、教師がコースを決めてしまうと抵抗感を持つ場合も懸念されるので、自己申告制の習熟度別でコースを分けた。担任と加配教師とで進度を合わせているので、途中からコースを変えるのはよいことにした。

「じっくりコース」の児童がわからないことなどを積極的に質問する様子が見られた。また、「すいすいコース」の児童には時間に余裕のある時に難問にチャレンジすることで意欲的に取り組む姿が見られた。

③ 週1回の小テストの作成及び採点

5問程度のミニテストを毎週実施し、学習内容の定着と意欲の向上を図った。その時期に学習している単元とはちがう単元の問題を選んで出しつつも、基礎基本の問題を中心とした出題のため、児童らは意欲的に取り組むことができた。

④ 朝学習の時間の取り出し補習

5年生を対象に、希望する児童に補習を行った。希望しない児童は、自教室で習熟のプリントなどを進め、その間、前時で分かりにくかったことを中心に復習をした。



⑤ 児童一人一人が具体的操作のできる教具の作成

本校は単学級の学年がほとんどなので、担任と教材研究をしたり、児童のモチベーションを上げたり、児童の理解を深めたりするような教具を工夫して作った。



⑥ 前学年の既習事項に困難を抱えている児童への個別対応

例えば、図形の面積や体積などの公式を覚えていても、小数や分数のかけ算・わり算の方法が定着していないために正答が出せない児童への配慮として、10問程度の習熟プリントを宿題として渡したり、添削をしたりしている。

⑦ 振り返りカードの作成

令和3年度は児童の振り返りについて、毎時間回収したものを一覧にして単元内での経過を見てきた。

6	● ● ● ●	A	A	B	倍の学習は少し難しかったです。だけでもっと大きな数の倍の学習最初は3つの関係図なんて作れるのかなあと思ったけど作れました！昨日と同じ倍の問題だったけど少し違うやり方の問題です。うま3つの関係図をもっと増やしてみたいです。
		A	A	B	
		A	A	A	
		B	B	B	
		B	C	C	
未提出					
7	● ● ● ●	A	A	B	倍の数をわり算やかけ算で考えるのが面白いなあと思いました。何をか考えるのは楽しいなあと思いました。倍の数を考えるときにすぐに考えられるようにとぼすので面白い2つの式を合わせるのが面白いなあと思いました。倍の勉強はいろいろな考えがあって楽しかったです。うまのほかにいろいろ考える倍ができた
		A	A	A	
		A	A	A	
		A	A	A	
		B	A	B	

令和4年度は、児童が自分でもその経過を見返すことができるとよいのではないか、との意見があり、児童自身が単元を通して振り返ることのできる形式に改善して実施している。

さんすう ふりかえりカード 1ねん

ばん	なまえ				
たんげん					
ひにち	たのしい	わかった	かんがえた	かんそう	
○	○	○	○		
○	○	○	○		
○	○	○	○		

さんすう ふりかえりカード

年	組	番	名前	
単元名				
△◇でふり返ろう				
月日	問題を意味を理解し、見通しをもって学習できた	図や式にして表したり、自分の考えを書いたり、変わったり深まったりした	友達のを聞いて考えが、変わったり深まったりした	学習をふり返って
○	○	○	○	
○	○	○	○	
○	○	○	○	

「振り返りを書くことによって、今日の学習が頭に入る。」「今日やったことを身に付けられる。」「振り返りカードに書いたことを次の時間に参考に使っている。」など、児童が振り返りを活用している声も聞かれた。

4 成果

- ・主題に迫るためには、素材選び・教材提示の工夫・単元構成の工夫を行う必要があり、そのことにより、児童の興味・関心や意欲が向上した。「考える楽しさ」につなげていくためには、まずは、興味・関心、意欲が大前提だということを再確認した。
- ・高学年でも、具体物や半具体物の操作、絵や図化・体験活動などを取り入れることは有用で、問いの意味理解を高めることができた。
- ・振り返りカードについて教師からは、「子どものつまずきに早く気付くことができた。」や「授業の構成や流れが、子どもにとってわかりやすかったのかどうかを、教師自身が振り返り反省することができた。」「評価に生かすことができた。」などの意見があった。

5 今後の課題

- ・少人数指導をさらに充実させていくために学習サポーター等を活用していく。
- ・低学年だけでなく、中学年・高学年でも場面によっては具体物や半具体物を積極的に用い、操作的活動を取り入れていく。
- ・学期毎に重点を1つ以上設定し、教材研究や教具の作成により力を注いでいく。
- ・家庭学習の手引きを配付し、保護者への啓発活動を続けていく。
- ・「考える楽しさ」を様々な場面で経験させていく。